

令和三年度生 入学選考試験 国語 「特待生入試」

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 E・T・A・ホフマンの『ブランビラ王女』という小説に、主人公が魔法の宮殿でご馳走攻めにあうくだりがあります。魔法使いのプルチネラが、たったひとりで次々に何人もの召し使いに变身して、料理人、酒蔵番、テーブル給仕人、酌人が⑧イツセイにそろい、舌なめずりしたくなるようなご馳走があつというまにずらりと並ぶ。

2 なるほど食べた当座はじつにおいしい。けれど後から考えてみると、どこかしら物足りないのです。時代がもうすこし前だったら、王子さまが食事をするのに、たった一人が何人もに化けて料理も給仕もするというようなセコい宮廷は考えられません。無数の料理人が作った料理を、ちよつとした軍隊ほどの規模の給仕人がぞろぞろ行列して運んでくるのが当たり前です。

3 ルイ十六世の料理番にしても一人や二人ではありませんでした。ホフマンはそういう絶対王朝が終わってしまった時代に登場してきた作家です。たった一人(国王)のために大勢のコックが料理を作るという時代はもう終わっていました。複数のコックが手を換え品を換え一人の王様に奉仕した、その当の王様がギロチンで首をちよん切られてから、コックたちはだれのために料理を作っているのか、さぞや途方に暮れたことでしょう。

4 いまではどこにも見掛けるレストランは、このフランス革命で宮廷の厨房を失業した料理人が街へ出て、新興階級のブルジョア目当てに開業した新商売だったといえます。要するに王宮廷という中心が解体して、そこから断片が街にとび散った。その断片の一つひとつが一軒のレストランになったわけです。料理の面でも革命が起こった。たった一人の王のために大勢が作る料理から、大勢(ブルジョア)のために一人のコックが作る料理へと転換した。大衆相手のコックは、むろん飽きられないためにあの手この手を尽くします。しかしかに工夫を凝らしても、工夫を凝らす当人は一人。いかに多彩な外観を⑥テイしても、一定の好みを有する一人のコックがすべてを取り仕切っている、資本主義経営の限界というものでしょう。

5 ここから過ぎ去った王侯貴族のぜいたくを復元するにはどうしたらいいか。飛び散った断片を拾い集めて、複数のコックが飼われていた王朝の食卓を復元すればいい。ということは、客がレストランをしらみつぶしに一軒一軒歩く、食べあるきをこまめに実行するしかありません。ではグルメ食べあるきは、果して④いにしへの栄光を再現し得たでしょうか。

6 ⑧やんぬるかな、にわか成金は足を使ってしょっちゅうバタバタ食べあるいていなければなりません。王様はあるかかない。黙って座っていれば次々に天下の珍味が目の前に運ばれてきます。ここがグルメ食べあるきに①汗くさい時間のおいが介入して、優雅になり切れない弱みでした。あちらは時間がゆったり流れました。(1)こちらにはせつせと食べあるいて、猛烈な時間の加速運動に巻き込まれる。なんのことはない、昼間の労働と大して変わりはありません。しよせん、お里は知れていたのです。

7 しかしそれなら、居ながらにして山海の珍味を目の前に運ばせる王様が食の楽園を体験しているかというところ、どうもそうは思えません。食の楽園といえ、その楽園の食はどうだったのでしょうか。楽園の住人だったアダムは何を食べていたのでしょうか。

8 ミクロネシアの人びとは今でも四種類の芋だけを常食にして、それを適当に料理しているのだそうです。彼らはトンカツもラーメンも食べたことがない。(2)、極端に限定された食情報のなかで生きていくわけです。アダムもざつとそんな状況にあったのではありますまいか。彼が⑨ダラクしたのは、食いしん坊のイヴに誘惑されて、それまで食べたことのない知恵の木の実を食べてしまったからでした。楽園とは情報のないこと、(3)乏しいことの幸福だったのです。知らないうちが花なのよ、なのです。

9 ②それでは食べ物などに関わってはいは、楽園に到達もしくは帰還できないのでしょうか。そうともかぎらないでしょう。食べないでいて食べている、という食べ物とのつきあい方もあるからです。

10 目の前においしいものが山盛りになっていて、それでも手をつけられない。そんなことがよくあります。⑩ノドから手が出るほどうなぎが食いたいのに、先立つものがない。どうするか。うなぎ屋の店先に立っておいを嗅がせ

てもらおう。

11 一方、うなるほどお金があっても病人なら何も食べられません。チフスカ何かの回復期に猛然と食欲が湧いてくるのに、ドクター・ストップが掛かっていて何も食べられない。(4) 外出は禁止。吉田健一の『饗宴』<sup>きょううげん</sup>というエッセイは、そんな病人が想像力だけを放し飼いにして病院を抜け出させ、街のうまいものを屋を総ナメにして、果てはアルゼンチンの丸焼きにした牛の腹のなかに入って内臓まるごとつかみ食いする結末まで、一気呵成<sup>かせい</sup>に食に食まくる大空想<sup>しよくみ</sup>食味紀行<sup>じぎやう</sup>でした。ここらが食味道の極意ということでしょうか。

12 そういえば内田百閒の『餓鬼道肴蔬<sup>ごうせ</sup>目録』も第一級の夢想のメニューでした。戦争中の「昭和十九年の夏の初め段食べるものが無くなったのでせめて記憶の中からうまい物食べたい物の名前だけでも探し出して見ようと思いついて」作った目録だそうです。「さはら刺身、生姜<sup>しょうが</sup>醤油」、「押麦<sup>おしむぎ</sup>でない本当の麦飯<sup>むぎめし</sup>」といった、戦中物資欠乏の世の中でなければ何でもない食べ物ばかりが、七十八品ずらりと並んで、どれも食べられないがゆえに天上の美味美酒のようにキラキラ輝いています。

13 ことほど左様に、食べられる物はまさに食べられるがゆえに食べ物という現実の限界を越えられません。美食などといってみてもたかが知れています。しかし幻の食べ物、遠くにあるわけではなく、「さはら刺身」、「押麦でない本当の麦飯」くらしいの近くにあつて、(5) それを到達不可能な遠くに転位させる想像力によって生かされています。想像力は絶対の探求を指しますから、それ自体が実現することはあり得ません。しかし◎レンキンジュツ師の賢者の石探求が探求の途上に白金やマイセン陶器のような副産物を生み出すのと同じように、絶対の美味探求の途上にも副産物ができて、とりあえずはそれをおいしくあるいはまずく頂くわけですが、そのうまいまずいの試金石になるのも、やはりあのいつまでも実現することのない絶対の食べ物なのです。

(注) 吉田健一：英文学者、評論家、小説家(一九二二～一九七七)。

内田百閒<sup>ひゃくけん</sup>：小説家、随筆家(二八八九～一九七二)。

さはら：鱒<sup>ますわ</sup>。内田百閒の出身地である岡山県ではとくによく食べられる。

賢者の石：中世のヨーロッパで、鉛などを金に変える際の触媒とされた物質。  
マイセン陶器：ヨーロッパのマイセン地方(現ドイツ)で作られる陶磁器。

問一 二重線部②③のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 傍線部A「いにしえの」、B「やんぬるかな」を、それぞれわかりやすく言い換えて答えなさい。

問三 傍線部①とあるが、「汗臭い時間の匂いが介入」するとはどういうことか。六十字以内で説明しなさい。

問四 (1) (5) に入るのに適当なものを選び、記号で答えなさい

ア しかし イ むろん ウ しかも エ もつとも オ あるいは カ 要するに

問五 傍線部②とあるが、私たちが「楽園」に到達するためには何が必要だというのか。それを言い表した一語を、本文中から抜き出して答えなさい。

問六 筆者の考えに合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア おいしそうな料理を前にしても我慢し、あえて自分がいつも食べているものを食べるという禁欲的な行為によって、ほんとうの美味を味わうことは可能になる。

イ 人間が頭に思い描く究極の食べ物、実際に食べることはできないものだが、料理の良し悪しを判断する際の基準にはなりうる。

ウ 食情報の乏しさゆえの幸福というものもあるが、それを取り戻せないのならば、自分にとっての絶対的な美味を夢想することの幸福を味わうべきであろう。

エ 絶対の美味探求の途上には副産物が生じるが、その副産物の氾濫は、今日のようなグルメ食べあるきの一般化という傾向を促すことになった。

オ 自分の頭のなかに天上の美味を思い描き、その美味を実際に食べるための方法を模索するというあり方こそ、食味道の極意ともいえるものである。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

大型トラックが一人の通行人をひいた。居あわせた人々はこの男になにかをしてやるために、倒れている男のそばへよって、かわるがわるかがみこんだ。上着をひらいてやる人、それをしめてやる人。起そうとするかとおもうと、逆にまたねかそうとする。とにかく救急車がやってきて専門的で適切な処置をしてくれるまで、時間ふさぎをする以外、みな何もしようとしなかったわけである。一人の紳士と婦人がそこへ近づいてくる。彼女は心臓とみぞおちのあたりに不快なものを感じたが、彼女自身はそれを同情心だと心えていた。紳士の方はしばらく黙っていたあと、彼女にむかってこういった。「この町で使われている大型トラックは制動距離が長すぎるのです」。婦人はこのことばで気がかるくなつたように感じて、①「ジョサイのないままなごしを送って、相手に感謝の意をあらわした。彼女はこれまで何度かこのことばをきいたことがあったのだが、制動距離とは何なのかは知らないし、別に知りたいとも思ってた。ただこのことばで、おそろしい事件がなんとか片づけられて、自分にはもうなんのかわりもない工学の問題に移されたので満足したのである。それに救急車の警笛がけたたましく鳴るのもきこえてきた。車の到着の迅速さが、待つ人たちの心を（1）でみした。」

小説「特性のない男」の中で、ロベルト・ムジルはこうした一つの場面をえがいた。その場に居あわせた男たちは、被害者をだきおこしたり、ねかせたり、上着をひらいたり、ひらいたのを閉じたり、あれこれの処置をめぐりめぐり、彼のためになろうとする。居あわせた人間として、彼に対する連帯性がそこには滲透しているようにみえる。けれどもこの男たちは、自分がたまたま現場にいた以上、なにかをして自分なりの処置の結果をださなければ、自分がおかれた状況にふさわしくないということから、それぞれぬげぬげない方策をとつたのである。

一人が被害者をだきおこすことで自分のなすべき処置を果して満足すれば、つぎの番の男は当然のこと、今度はねかすことで自分の（2）を果す。そしてそこへやってきた婦人は、むごたらしい光景を突然眼のまえにみただめに、とたんに胸がしめつけられ、どろろがうちだしてむかつく。ということは、②ムザンな目にあつた人間にむかつて、その光景にふさわしい感情がわいたわけだから、自分のなかに被害者への（3）が発生したのだと感じて彼女は安心する。

事実としては、同情とは相手におこっているのとおなじ感情が自分のなかにおこることをいうのであって、同苦、同悲、同歎のように、相手ともどもに自分もともに苦しみ、ともによるこぶのが同情である。ところが倒れている男を前にした婦人の方は、むごたらしいありさまをみることで吐き気をもよおしたのだから、その光景を自分から吐きだし、排除して、自分を相手から遠ざけたいと感じたというのが真相である。

そこへ救急車の警笛がひびいてくると、ことはすべて専門家が処置すべきであるから、偶然そこに居あわせたことでもかかわってしまった人々がめいめいとるべき行動は、制動距離が長すぎたせいだと断言した人のような評論家的態度のとり方もふくんで、これで充足され完結されたわけであって、みな安堵して立去れる。そしてすべてはあまりをださずにみごとに処理されて、ことは完了したのである。

③一見連帯性をもとでにふるまつたかみえたいめいの行動のしかたは、だから相手のためにおこなわれた同情的行為とは無縁で、その場に偶然かかわりあつてしまった身として、どうしたらもつとも自分のためになるかというぬげぬげのない④ドウサツリョクをもとでに出された解答である。男たちは冷静に状況を読んで手段を⑤コウじたし、女はその場にふさわしい感情的反応をしめた。そして被害者を交通事故の一事例として処理する役割をもつた救急車が着くことが確認されれば、もう自分がふるまうべき役は完了したのだから、そこから安心して立去れるし、無用なものは立去るのが当然なのである。

この全経過をとおして、被害者のためとか、被害者とともにという心情的連帯性を母胎としたかかわりあい方はまったく抜けているし、また居あわせた人々同士のあいだにも、この種のかかわりあいはない。その場にいた人々は知的次元ではそれぞれのしかたでかわりをもつたけれども、心情の水準ではだれも無関係でばらばらなままである。

ムジルが設定したひとつの象徴的光景での人間の行動のしかたをみると、人々はめいめいばらばらで、だれもはなればなれの孤独に生きている、これが今の時代での人間のあり方なのだ。とふつう考えられているけれども、決してそうではない。たこつばにこもっているようにはなればなれで、孤独の穴のなかであちこちに散在しているのだったら、ばらばらな孤独といえようが、この事件で象徴されているような公共の広場でのつきあいの場合はそうではない。自分がおかれた状況のなかで、人々は自分のまわりにいる人たちに心をくばりながら、触角を四方へふりたてて、自分とるべき行動を冷静に迅速に割りだす。そうした神経を張りめぐらせた人間への関与というものが、社会の網の目のなかで生きるためには欠かせないのである。まわりの同僚や取引相手などにこまかに気をくばって協同の仕事を展開させ、自分を適応させてゆくのが必要な心がまえだから、今の時代の孤独といわれるものは、ただはなればなれの孤独といつたのでは実態にあわない。まわりの人々と緊密にかかわりあいが心情的には連帯性を欠いた生存のしかた、それが「現代の孤独」なのだといえる。

⑥現代の孤独ということばをきくと、機械に仕えるようになった人間とか、機械にかえられた人間をだれでも連想して、人間は歯車になつてしまつたとなげいたり、自蔑したりする。機械の一部品にかわつた人間は、人間独自の発想や行為ができなくなり、上からあたえられた指令のとおり運動しなくてはならない。そして機械である以上、がらに乾いた金属製品である。いまの時代に生きる人間は生きる意味を、生きがいをなくしてしまつた。

多くのひとはいまの世の人間をこうあわれんだりなげいたりするけれども、人間が歯車にかわつたからといってさ

げすむことはない。(一)もし人間が機械の一部品としての歯車であったなら、その一個の歯車を機械からはずしたら、機械はすぐ運行をやめるはずだからである。精密な時計から歯車を一つだけのぞいたら、時計は即座にとまってしまう。したがって人間が歯車ならば、その一人の人間がある日もし職場にでてゆかなかつたら、その職場の作業はとまり、その職場をふくむ全部の組織が機能を停止するはずである。だからそのひとは組織にとつて決定的に大切な重要人物である。人間が一個の歯車であったら、こんなすばらしいことはなく、つとめに毎日でてゆく生活は生きがいでみちている。

(二) 事実としては、一人の職員、従業員が休んだからといって、企業体や官僚機構の機能になんのさしさわりも発生するはずはない。(三)、人間が機械の部品にかつたたとえていうなら、歯車と表現するよりも、人間は一本のネジであるといった方がふさわしくなる。

ひとりのカメラマニアがいた。高級カメラを一つ海外に発注してから数カ月たつて、機械が手もとにとどいた。それで彼は大よこびでこの機械を解体しにかかる。こまこました手数をかけたのち、彼のまえにたくさんの部品がずらりとならんだ。今度はそれを組みたてる番である。もっと入念な注意をはらいながら、彼は部品を再構築する。そしてとうとう組みあがつたカメラがもう一度彼のまえにあらわれた。

① しかし機構認識の欲求はもう満足されてしまったので、いまさら煩わしい作業をくりかえすのはかなわない。

② それでこの機械をカメラ店へ売却したところ、それは新品同様ということが高価でひきとられたということである。

③ これを組みこむためには、また機械を解体しなくてはならない。

④ これで作業は完了したし、彼の目的は満足されたわけであるが、ふとそこにネジが一本あまつているのに彼は気づいた。

ネジ一本なら、それがはずれていても機械の機能にはなんのさわりもない。ことによると耐久性が多少さがるかもしれないが、あとになつても「ガタがきた」なら、その場所に一本の同型のネジをあてがい、ついでにまわりの仲間のネジたちをしめつけておけばそれで十分である。

巨大で精密に分化している組織化社会のなかでは、人間は一本一本のネジだといえるし、ネジには個性がなく、いろいろな型の類型だけがある。かけがえないこのネジでなくてはおさまらないということはない。そして交換部品はいくらでも入手できるから、なるべく◎ガンジョウな出来のをえらぶことである。

(注) ロベルト・ムジル R.Musil (一八八〇〜一九四二年)。オーストリアの小説家。小説『特性のない男』はドイツで発表された。

問一 二重線部㉔㉕㉖のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 (1) (2) (3) を補うには、次のうちどれが適当か。それぞれ次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 正義感 イ 悲哀 ウ 同情心 エ 義務 オ 満足感 カ 共感

問三 (1) (2) (3) (4) を補うには、次のうちどれが適当か。それぞれ次の中から一つ選び記号で答えなさい。

問四 ア そうしてみると イ たとえ ウ なぜかというト エ それに オ やはり カ しかし  
傍線部④の「一見連帯性をもとでふるまったかにもえためいめの行動のしかた」について、現代人のどのような傾向が現れていると考えられているか。次のうちから適当なものを選び記号で答えなさい。

ア 現代人が、集団的な現代社会の一員でありながらも、自己犠牲を避けようとして、表面的な関係だけで同情心を欠いた姿勢をとる傾向。

イ 現代人が、社会性を帯びた市民としての役割を演じるとき、感情的な行動を抑制し、無責任で信頼感のない存在にまで失墜する傾向。

ウ 現代人が、協同性を有する社会的な目的実現に対して、他人の参加を傍観しながら、自らの行動だけを強調する没交渉的な人間関係に満足する傾向。

エ 現代人が、公共的な社会組織の中で、周囲との密接な関係を余儀なくされながらも、心情的には相互に無関係な状況に陥る傾向。

オ 現代人が、組織性の高度に発達した都市の中で、他人から無責任だとされる非難を避け、自らの専門的な知識だけにこだわり全体に無関心な傾向。

問五 傍線部⑧の「人間は歯車になってしまった」という表現に対して、「一本のネジ」であるという表現をするところに、現代についてのどのような認識があるか。次のうちから適当なものを選び記号で答えなさい。

ア 現代のあらゆる社会組織において、人間は目的や目標をもちえないままに機能すると考えられるのではなく、存在の生殺与奪までも管理されているほど絶体絶命の危機にあるというべきである。

イ 現代の高度に発達した組織的社会において、人間は単に互換可能な部分品として機能すると考えられるばかりではなく、存在価値さえも見失われているほど深刻な事態にあるというべきである。

ウ 現代の細分化された巨大な社会において、人間は個性を生かすことを企図して機能すると考えられるのではなく、差異性しか認められずに存在価値が失墜しているほど絶望的な破局にあるというべきである。

エ 現代の機械中心の物質文明において、人間は社会組織に一つの役割をもつ存在として機能すると考えられるのではなく、没個性的であることが評価されるほど滑稽な運命にあるというべきである。

オ 現代の企業体や官僚機構において、人間は協調性をもって調和的に機能すると考えられるのではなく、あたかも消耗品のように非人間的な扱いを受けるまでに屈辱的な立場にあるというべきである。

問六 文①～④は原文を並べ替えてある。正しく並べ直すとすれば、次のうちどれが適当か。一つ選び記号で答えなさい。

ア ④①②③ イ ①②④③ ウ ②①③④

エ ②④③① オ ④③①②

問七 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び記号で答えなさい。

ア 現代人の特徴は、自己の利益を求めながらも、なお社会の中で調和的に生きることを強いられているという矛盾を抱えるところに起因する。

イ 現代人がさまざまな能力をもつとみえるものは、個性ではなくて類型にすぎないということが出来る。

ウ 現代人の悲哀は、機械文明の中で生きがいを見失うとともに、社会の中で生きがいを見失うという二重の喪失感に襲われていることにある。

エ 現代人は、社会的役割を見出すことができないままに、大衆のひとりにとどまっているという意味で孤独である。

オ 現代人は、連帯感を示す行動の事実の背後に真相を隠すことで人間を裏切り、社会を裏切るという絶望的な宿命を背負っている。

カ 現代人は、ばらばらの孤独に生きていながら、その行動様式が画一的であることはきわめて皮肉な現象である。

問八 傍線部の「現代の孤独」は、「人間の行動のしかた」から考えればどのようなものか。本文の趣旨に基づいて説明しなさい(句読点とも四十字以内)。